

王たちの創造

(創世記 1:26-28)

はじめに

私たちはこれまで、ヨハネの手紙を通してクリスチャンの救い、クリスチャン生活（教会生活）、またクリスチャンの希望について学んできました。それら全ての土台となっていたのは、「クリスチャンとはどういう存在なのか」ということです。今日はさらに遡って、「人間とはどういう存在なのか」ということを創世記から見ていきましょう。神は何のために私たち人間を創造されたのか、ということです。

前橋聖書フォーラムは「ヘブライ的視点で聖書を学ぶ」ということを目標にして集っています。もうひとつ、私たちは一昨年の夏から「イスラエルのために祈る」ということも活動のひとつとして集っています。その祈りを深めるために、いつも月の後半の学び会では、イスラエルについての理解を深めてきています。今回の学びはイスラエルと直接関係はないと思われるかもしれませんが、しかし、神は目的をもって人類を創造し、その目的のために、人類の中からイスラエルを選び出されたのです。今日はそのことを詳しく説明することはできませんが、今申し上げたことの意味は、後々の学びを通して明らかになっていくことでしょう。いずれにせよ、今日は私たち人間に与えられた本来の使命、私たちの本来の目的についてのメッセージになります。

さて、御言葉の解説に入っていく前に、これから学ぶ創世記 1:26-28 の文脈を大まかに確認してみたいと思います。創世記から申命記まではモーセが書いたのだと伝統的に言われていますが、モーセは創世記の中で、神は「六日間」で世界を創造されたと言っています。その中でも、人の創造を記録している創世記 1:26-28 は、創造の「第六日目」の出来事です。ちなみに、第七日目は創造の業をすべて終えられた神の安息の日です。ですから、この六日目の出来事が、神の創造の御業のクライマックスになります。

神は人を創造される前に、光、空、海、植物、星、海の生き物、鳥、地の獣、家畜、地面を這うすべてのもの、といった順番で創造の御業を行って来られました。その中で「地の獣」「家畜」「地面を這うすべてのもの」が、第六日目に創造されたものたちです。創造の御業が完成する日、これら動物の後で、遂に人間が創造されることになるのです。今日はその様子を詳しく学んでいきましょう。

本日のメッセージのアウトラインは、以下の通りとなります。

講解

1. 神のかたち（創 1:26）
2. 人の創造（創 1:27-28）

結論

1. 人の本来の使命
2. 私たちへの適用

講解：創世記 1:26-28

1 神のかたち (v. 26)

まず、改めて 1:26 を読んでみましょう。

神は仰せられた。「さあ、人をわれわれのかたちとして、われわれの似姿に造ろう。こうして彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地の上を這うすべてのものを支配するようにしよう。」

ここで注目したいのは、最初の言葉です。神は「さあ、人をわれわれのかたちとして、われわれの似姿に造ろう」と仰せられました。これまでの被造物はすべて、「光、あれ」(1:3)、「地は生き物を種類ごとに、家畜や、這うもの、地の獣を種類ごとに生じよ」(1:24) など、「……あれ」という命令によって創造されました。しかし、ここでは「さあ、……しよう」という言葉遣いになっています。最後にこのような言葉遣いが出てくることで、読者の心は惹きつけられるでしょう。遂に創造の御業がクライマックスを迎えるのです。

この最初の言葉の中でさらに注目したいのは、神が「われわれ」という複数形の一人称を使っておられるということです。この意味については色々な解釈がありますが¹、私たちは後の啓示から、聖書の神は三位一体の神であるということを知っています。神はおひとりですが、御父も御子も御霊も神です。ここで神が「われわれ」と言われていることは、この三位一体の教理と合致しています。

次に、神はご自身の「かたち」として、またご自身の「似姿」に人間を造ろうと仰っています。神は霊であり(ヨハ 4:24a)、物理的な体を持ってはいません。では、人がその神の「かたち」に造られたとはどのような意味なのでしょう。よく言われるのは、人は神に似た「性質」を持つ者として造られたのだということです。人は神と同じように、知性があります。感情があります。意志があります。また、神を認識する能力である「霊性」があります²。人は神と霊的な交わりを持つことができる存在として造られました³。これは、人の特別さを示しています。

確かに、以上のようなことは後の啓示から明らかになる真理です。しかし、モーセがここで人が神の「かたち」として創造されたと言っている時、どのようなことに強調点が置かれているのでしょうか。

ここで「かたち」と訳されている言葉は「ツェレム」というヘブル語です。新改訳 2017 の注には「別訳『像(かたち)』」と書かれていますが、この「ツェレム」というのは、まさに「像」という意味も持っている言葉なのです。また、「似姿」と訳されているのは「デムット」というヘブル語です。これも「ツェレム」と似た意味を持った言葉なのですが、どちらかという、日本語訳で表されているような「似ている」という意味に強調点が置かれています。

このような「神のかたち」「神の似姿」という概念は、古代(モーセが生きていた時代)の中東では一

般的なものでした。古代中東（エジプトやメソポタミア地方）での神の「かたち」や「似姿」という概念は、王と関係していましたが⁴。ここでの「神」は聖書の神ではありませんが、王はその神の「かたち」また「似姿」だと考えられていました。当時、王はある土地を征服すると、自分の像や、自分の役職／役割を記したモニュメントをその土地に建てることがありました。その像やモニュメントが、ヘブル語でいうところの「ツェレム」です。征服して自分の「ツェレム」を建てた王自身が、彼の背後にいる神の「ツェレム」でもあると考えられていたのです。そういった歴史的背景を考えると、モーセがここで言っている「かたち」や「似姿」も、王という概念と関係しているのだと考えられます。神はこの被造世界の王であり、治めておられる地上にご自身の「ツェレム」として人を置かれたのです。

旧約聖書や古代中東の文脈では、「かたち」も「似姿」も神と人との関係を示しています。特に「かたち」という言葉で強調されているのは、神も人も王だけれど、人は神に仕えている存在なのだという事です⁵。また、「似姿」という言葉で強調されているのは、神と人は父と子の関係にあるということ——つまり、人は「神の子」だという事です⁶。

この考え方をふまえると、モーセがここで神の「かたち」や「似姿」という言葉を使って強調しているのは、人は神の代理の王として、この地上を治めるために造られたということです⁷。そのことは、26節の後半からもわかります。神は「こうして」、人が「すべてのものを支配するようにしよう」と計画されました。ここで「支配」と訳されているヘブル語の動詞「ラーダー」は、王の働きを示す言葉です（詩 72:8 参照）。やはり人は、この被造世界を治めるべき神の代理人として造られたのです。

2 人の創造 (vv. 27-28)

続いて、27節をお読みしましょう。

神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして人を創造し、男と女に彼らを創造された。

創造の第六日目の最後、神は実際に人をご自身の「かたち」として創造されました。さらに、後半には「神のかたちとして人を創造し、男と女に彼らを創造された」とあります。「人」と訳されている言葉は「アダム」ですが、これはアダム個人の名前ではなく、一般的な「人」という意味です。興味深いのは、ここでの「アダム」が単数形だということです。人（アダム）という一つの存在は、「男と女」という複数の存在によって構成されるものとして創造されました。

このことから、二つのことがわかります。第一に、人は神の「かたち」として、神の三位一体の性質をも反映する存在として造られたということです。神もまた唯一ですが、複数の位格を持っておられます。この「一致」と「多様性」というユニークな神のご性質と似たものが、人にも反映されているのです。

第二に、被造物の王として創造された人（アダム）はただ一人ではないということです。27節の時点で、既に神のかたち（王）は二人います。「男と女」——つまり、アダムとエバです。神は人間自体を被

造世界の王として創造されました。アダムもエバも「人」であって、神のかたちとして創造されています。ですから、ふたりとも、被造世界の王として造られたということがわかるのです。さらに 28 節を読むと、王はアダムとエバの二人だけでもないということがわかります。

神は彼らを祝福された。神は彼らに仰せられた。「生めよ。増えよ。地に満ちよ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地の上を這うすべての生き物を支配せよ。」

神はご自身の「かたち」として創造した人を祝福し、役割をお与えになりました。最初に言われている役割は、「生めよ。増えよ。地に満ちよ」というものです⁸。次に、「地を従えよ。海の魚、空の鳥、地の上を這うすべての生き物を支配せよ」という役割が続いています。

ここから分かるのは、「地を従える」「支配する」という役割が、アダムとエバの子孫にも与えられているということです。神はご自身の「かたち」として、アダムとエバについては直接的に（ただし、エバはアダムのあばら骨からですが）創造されました。しかし、それ以降の神の「かたち」を生み出していく役割は、アダムとエバに与えられました。

ここで「支配せよ」と訳されている言葉は、26 節に出てきた「支配する」と同じ「ラーダー」という動詞です。また、「従えよ」と訳されているのは「カヴァシュ」という動詞で、征服するというような意味合いがあります（II サム 8:11 参照）。これもまた、王の行いを示す言葉です。つまり、アダムとエバが創造されたのは、王としての役割を担う他の神の「かたち」を生み出すためでもあったのです⁹。言い換えれば、アダムとエバの子孫もまた、被造世界の王という役割を担っているということです。そして、そのアダムとエバの子孫には、当然私達も含まれているのであります。

結論

1 人の本来の使命

今日創世記 1:26-28 から学んだのは、人が創造された時に与えられた本来の使命とは、神の代理の王として被造世界を治めることだ、ということでした。その内容は、ダビデが歌った詩篇 8:3-8 で繰り返されています。

³ あなたの指のわざである あなたの天

あなたが整えられた月や星を見るに

⁴ 人とは何ものなのでしょう。

あなたが心に留められるとは。

人の子とはいったい何ものなのでしょう。

あなたが顧みてくださるとは。

- ⁵あなたは 人を御使いより
わずかに欠けがあるものとし
これに栄光と誉れの冠を
かぶらせてくださいました。
- ⁶あなたの御手のわざを人に治めさせ
万物を彼の足の下に置かれました。
- ⁷羊も牛もすべて また野の獣も
- ⁸空の鳥 海の魚 海路を通うものも。

ある神学者は、詩篇 8:5-8 は「創世記 1:26-28 の解説だ」と言っています¹⁰。6 節では「あなたの御手のわざを人に治めさせ／万物を彼の足の下に置かれました」と言われていますが、これはまさに、先ほど学んだ内容と同じことです。

再来週詳しく学びますが、人は墮落して神に裁かれ、被造世界の王としての役割を果たすことができなくなってしまいました。しかし、この役割自体が失われてしまったわけではないのです。ヘブル人への手紙の著者は詩篇 8:4-6 を引用した後、こう言っています。

^{8b} 神は、万物を人の下に置かれたとき、彼に従わないものを何も残されませんでした。それなのに、今なお私たちは、すべてのものが人の下に置かれているのを見てはいません。⁹ただ、御使いよりもわずかの間低くされた方、すなわちイエスのことは見えています。イエスは死の苦しみのゆえに、栄光と誉れの冠を受けられました。その死は、神の恵みによって、すべての人のために味わわれたものです。(ヘブ 2:8b-9)

ここではまず、人は被造物を治めるために創造されたのにその役割が実現していないと言われています。その後で、主題はイエスに移っています。つまり、人の役割がイエスに適用されているのです。ヘブル書の文脈では、既にイエスが宇宙を治めておられるのだということが言われています (1:3 参照)。ヘブル書の著者は、人間の王としての役割は実現していないように見えるけど、神が人として来られた方であるイエスは現に今万物を治めておられるのだということを強調しているのです。そしてここには、s 将来イエスが実際に地上で万物を治めるのだという希望も表されていると思います¹¹。なぜなら、パウロによればイエスは人間の代表、「最後のアダム」だからです (I コリ 15:45; ロマ 5:14)。先週の学びでは、パウロもコリント人への手紙第一 15:24-28 の中で詩篇 8 篇の内容をイエスに適用し、王としての人の役割は将来イエスにあって実現するという希望を持っていることを見ました。ヘブル書の著者もまた、パウロと同じ希望を持っていたと考えてもおかしくありません。

さらに、ここでは万物の王であるというイエスの役割が、十字架の死と繋がられています。イエスは死の苦しみによって人の失敗を贖い、それ故に「栄光と誉れの冠を受けられました」。このイエスの死は、「神の恵みによって、すべての人のために味わわれたものです」。もちろん、この「すべての人」の中に

は私たちも含まれています。イエスが十字架の贖いによって被造物の王という役割を果たす権限を得たのなら、イエスにあって贖われた私たちは、イエスにあってその権限を持っているのです。

そして、イエスが実際に地上を統治されるのが、将来の千年王国です。この王国では、イエスにご自分が贖った人たち、つまり私たちと共に地上を治められます。

また私は多くの座を見た。それらの上に座っている者たちがいて、彼らにはさばきを行う権威が与えられた。また私は、イエスの証しと神のことばのゆえに首をはねられた人々のたましいを見た。彼らは獣もその像も拝まず、額にも手にも獣の刻印を受けていなかった。彼らは生き返って、キリストとともに千年の間、王として治めた。(黙 20:4)

こうして、人(アダム)に与えられていた「地を従えよ」という命令は、成就することになります。私たちクリスチャンは、イエス・キリストの死と復活を信じた結果、この成就に与ることが許されているのです。クリスチャンが持っている希望は、こんなにもスケールが大きい希望なのです。

2 私たちへの適用

最後に、今日学んできたことが私たちのクリスチャン生活とどう関わっているか、その適用例を考えてみたいと思います。

「終末論はクリスチャン生活の動機である」とは、よく言われていることです。このメッセージを準備する中で私が考えたのもそのことでした。イエスの再臨を待ち望むという「再臨待望」の信仰は、私たちがクリスチャンにふさわしい生活を送るための動機になります。

ここで言っている「クリスチャンにふさわしい生活」とは、ただ道徳的な罪を避ける生活というだけではありません。パウロはコリント人への手紙第一 10:31 で次のように言っています。

こういうわけで、あなたがたは、食べるにも飲むにも、何をするにも、すべて神の栄光を現すためにしなさい。

私たちは将来イエスが再臨された後、王として地上を治めることで神の栄光を現すようになります。私たちが「御国の子どもたち」(マタ 13:38)であり、「私たちの国籍は天にあります」(ピリ 3:20)という御言葉は、私たちがそのようなアイデンティティを持った存在だということを教えているのです。このような意識をしっかりと保つことは、今のクリスチャン生活にも影響を与えていくのではないのでしょうか。実際に地上を治めるのは将来のことですが、アダムの子孫であり、さらにイエスによって贖われた私たちは、今すでに神の「かたち」なのです。だから私たちは、この世においても「何をするにも、すべて神の栄光を現すために」することを期待されているのです。だから、クリスチャンは音楽、芸術、建築、農業、政治、教育、スポーツといった生活や文化の全領域に参加することができるし、関心を持つべきで

す¹²。それによって神の栄光が現され、同じ「御国の子どもたち」になる兄弟姉妹を一人でも多く得るためにです。こう考えてみると、伝道というのは神の御国の計画と密接に関係していることがわかります。私たちが生活の場で神の栄光を現してイエスを証していくことは、御国で王となる人材を整えていくための神の働きに参加しているということなのです。私たちの目から見れば王となるのは将来のことでも、今の世においても、「御国の子どもたち」としての役割が与えられているのです。

また、私たちは「男と女」に創造されました。色々な適用が考えられると思いますが、ここでは私たちには役割の多様性がある、という点に着目したいと思います。聖書は男性と女性には役割の違いがあると教えていますが、男女の違いの他にも国によって、民族によって、また個人によっても役割の違いがあります。たとえば教会内の場合を考えても、皆が牧師や説教者というわけではないし、皆が賛美奉仕者というわけでもありません。また職業で考えても、それぞれに与えられている役割があるはずです。しかし、クリスチャンは皆、キリストにあって神の「かたち」であり、王としての使命が与えられているということは同じです。私たちはそれぞれにふさわしい役割や形で、神の栄光を現すために働いていくよう召されています。自分に与えられた賜物を用いて神の栄光を現していくならば、それがどんなに人間的に小さな役割に見えたとしても、それによって御国の計画が前進しているのです。

私がキリスト者学生会（KGK）に在籍していた時、「全生活を通した証」という言葉がスローガンのように使われていました。今回創世記を通して人の本来の使命を学んでみて、この言葉が改めて心の中によみがえってきました。全生活を通してイエスを証しする。それぞれにふさわしい役割でイエスを証しする。クリスチャン生活が長くなってくるほど「当たり前じゃないか」と思ってしまうようなことです。しかし、人が創造された本来の目的に根差した再臨待望信仰は、こういった基本的なクリスチャンの使命感をよりシャープにさせていくのだと感じています。

皆さんは、イエスの再臨を待ち望んでいらっしゃるでしょうか。待ち望んでおられるとしたら、その信仰が、クリスチャン生活にどのような影響を及ぼしているのでしょうか。今日、人の創造についての御言葉を通して、神はどのようなチャレンジを皆さんにお与えになりましたか。

¹ 松本任弘は「威厳，尊厳を表す複数，思案，熟慮を表す複数，あるいは三位一体を暗示する位格の複数などが考えられる」と述べている。松本任弘「創世記」『新実用聖書注解』宇田進・富井悠夫・宮村武夫共編（いのちのことば社、2008年）122頁。

² 中川健一「創世記4 第4日目～第6日目」ハーベスト・タイム・メッセージステーション <<https://subsplash.com/messagestation/top-page/mi/+fb905b3>>；2018年2月26日閲覧。

³ Allen P. Ross, *Creation & Blessing: A Guide to the Study and Exposition of Genesis* (Grand Rapids, MI: Baker Academic, 1996), 112.

⁴ John H. Walton and Craig S. Keener, eds., *NIV Cultural Backgrounds Study Bible* (Grand Rapids, MI: Zondervan, 2016), 8.

⁵ Peter J. Gentry and Stephen J. Wellum, *Kingdom Through Covenant: A Biblical-Theological Understanding of the Covenants* (Wheaton, IL: Crossway, 2012), 195.

⁶ Ibid., 194.

⁷ Eugene H. Merrill, “A Theology of the Pentateuch,” in *A Biblical Theology of the Old Testament*, eds. Roy B. Zuck and Eugene H. Merrill (Chicago: Moody, 1991), Kindle locations 350–413.

⁸ ジョン・セイルハマーは、28節の「生めよ。増えよ。地に満ちよ」は神の「祝福」を表しているのであって、命令として理解されるべきではないと述べている。John H. Sailhamer, *The Pentateuch as Narrative: A Biblical-Theological Commentary* (Grand Rapids, MI: Zondervan, 1992), 120.

⁹ Michael J. Vlach, *He Will Reign Forever: A Biblical Theology of the Kingdom of God* (Silverton, OR: Lampion Press, 2017), 61.

¹⁰ Gentry and Wellum, 196.

¹¹ F・F・ブルース『ヘブル人への手紙』宮村武夫訳（聖書図書刊行会、1978年）114–15頁；George H. Guthrie, “Hebrews,” in *Commentary on the New Testament Use of the Old Testament*, eds. G. K. Beale and D. A. Carson (Grand Rapids, MI: Baker Academic, 2007), 946–47.

¹² Vlach, 540–42.